

敗戦前夜の決断

福岡市早良区

川上 達

私は昭和20年8月14日、旧満州国奉天（現瀋陽）の陸軍病院に戦傷患者として入院していました。なぜあの悲惨な敗戦を前にして混乱の奉天にいたのでしょうか？

これを主題に私の戦争体験として語り始めたいと思います。

私は大正6年生まれで78才になります。小学生の頃から徹底した軍国主義を叩きこまれていました。自由主義、共産主義など子供心にも恐ろしいことだと思っていました。侵略など言葉もないし、大東亜共栄圏、自由の天地満州へなど若者に大陸熱を煽っていました。

当時は小学校卒業後、中等学校とって5年間の教育を受け、その間現役将校が配属され、厳しい軍事教育を受けました。教師は何も教えてくれませんし、何も知らない少年から青年期にかけてそれが当然と思って軍国調に鍛錬されていました。しかしそんな厳しい頃でも現今のように拝金、物欲、利己主義、また子供を甘やかすようなことはあまりなく、人々との間には乏しきを分け合う思いやりのある生活がありました。いじめのために自殺なんて聞いたこともありませんでした。友情もあったし反抗心も持っていました。ただ軍国調に対する反抗心は不可能でした。

満20才になり徴兵検査の結果、私は第二乙種、その頃軍需工場に勤務していましたので少し召集が遅れ、昭和13年9月22才の時補充兵として福岡連隊に入隊しました。初年兵の1期の検閲の終わった11月頃、福岡市内に猛烈な勢いで腸チフスが流行。現在の平和台にあった連隊からも患者が続出、全員外出禁止。そのような時私の母も運悪く感染、3日後に急死しました。明治生まれの母は、息子はお国に捧げた身体だから会わなくてもよいと気丈にも遺言して亡くなったそうです。1週間後外出して、仏壇の前で男泣きしました。

翌14年4月、中国北部方面第37師団要員として山西省奥地に派遣された私達は、2年8ヶ月の間約10名の戦友を亡くしましたが、16年11月無事紅葉の美しい母国に生還しました。そして12月8日太平洋戦争が勃発したのです。翌17年1月結婚。11月長男誕生。18年1月、2回目の召集令状に接しました。今回も同じ中国北部派遣第10旅団の一員として、太原の少し南方の陽泉より山奥に入った孟県に駐留。周辺の警備が任務で共産八路軍とのゲリラ戦でした。

間もなく陸軍伍長に任官。そのような11月のある日、偵察行動中、八路軍の埋設した地雷を踏んで右眼失明、左足骨折の重傷を負ってしまいました。本部から軍医の応援を受け深夜駐屯地に担送され、翌日トラックで陽泉陸軍病院へ。そこで3日後右目摘出、左足にギブス、ベット生活の始まりでした。

翌19年1月北京陸軍病院へ転送、内地還送だと知らされ3月興城へ、5月に入って新京（現長春）へ転院。ここでは松葉杖をついて歩けるようになり、盛んに歩行練習をしていまし

た。この努力が後日生死を分ける運命につながるものでした。病院の窓から、広漠たる大地の向こうに燃えるような赤い夕陽の中を南下する軍用列車が頻繁に望見され、どうしてだろうかと不審に思っていましたけど、戦後、歴史書などから関東軍の南方移動作戦だったと知りました。あとの満州北部の国境警備は開拓団などからの現地召集者で補充されていたわけです。

6月に奉天に転送され、やがて8月9日のソ連参戦進攻で満州北部は大混乱になりました。現在のように情報のない時で、病院内もデマなどでその機能は完全に麻痺していました。重傷患者は大変だったらしいです。私は幸い片杖で歩けましたし、右眼は眼帯で洗眼するだけになっていました。

そして8月13日病院長の示達に接したのです。それは各個人の判断で朝鮮経由で内地還送を待つか、あるいは原隊復帰を望むか、重傷者を除き決断を迫られました。釜山、下関の海峡は米軍の潜水艦で危険だと知っていましたので、思い切って中隊復帰を志願しました。右眼は失っても戦友のいる華北を選び、まだ敗戦になるなんて夢にも思いませんでした。病院内では寝台の鉄パイプを切断して木銃の先に付け、第2の白露の奉天大会戦をやるのだと本気で作業していたらしいです。この決心が生死を分ける重大な結果になるとは思いも及びませんでした。

翌8月14日早朝、原隊復帰を願い出た約200名の独歩患者は、大混雑の奉天駅ホームをかき分けながら貨物車に乗せられて天津に向って出発、山海関を越えたのが15日の未明、その朝は不気味なほどの静けさでした。そして正午前天津陸軍病院に到着、敗戦を知らされ呆然自失、玉音放送を雑音の多いラジオで聞かされました。

病院は国府軍と米軍の占領下で給与もよく、若干デマに悩まされましたけど無難な生活を送り、20年11月、米軍の上陸用舟艇で佐世保に上陸。1週間後召集解除。妻子と約2年ぶり再会を果たしました。

戦後になって歴史など研究してみますと、私達の青春時代に費やされた血と汗と涙は、何であつたのかと空しい悲壮感に襲われます。侵略軍の一員として大陸を蹂躪した事実はどうしようもありませんが、2回の応召中、私達の部隊は数多くの戦死者を出しましたが暴行虐殺など絶体ではありませんでした。侵略戦争、不戦決議、謝罪外交などテレビ、新聞で眼にふれますけど何も知らず知らされず無惨に散って征った若き戦友のことを考えると、何とも言えない憤りを覚えてなりません。奉天陸軍病院に残留してシベリア送りになっていたら、生還していなかったと思います。戦傷の後遺症に悩みながら幾多の困難を乗り越え、戦後50年をよく生きぬいたものだと幸運に感謝しています。

今後は、若くして散って征った戦友のためにも頑張っってその霊を慰めたいと考えております。